



小さなトンネル の向こうに



色野そらら

さくらちゃんのすんでいるまちに
あたらしいこうえんができました。

おともだちの あおくんとすなあそび。

りっぱなおしろができました。

いつか、ふたりですめたらいいね。

おひめさまと、おうじさまで、
いっしょに たのしくくらすんだ。

さあ、
こんどは、もりのなかに ぼうけんにいきましょう。

ままは、おしゃべりにむちゅう。

あっ

クローバーのはたけがひろがってるね。

よつばのクローバーをみつけると、しあわせになれるんだって。

やったああ

さがそうさがそう。

でも、しあわせってなあに？

しらなあい。

クローバーばたけで、
よつばのクローバーをさがすのにむちゅう。

「あ！

すごい！

クローバーばたけのなかにかわいらしいひとがいたよ。

ねえ、あおくん、きてごらん。」

「むしじゃないの？」

「ちがうよ。

はねがはえているちいさな人なの。」

「ほんとうだ。」

「ねえねえ、きみ、

きみは、ここにすんでいるの？」

「おしろ」

「えー。

ほんとうに？

どこどこ？」

「むこう？」

「あのがけのところ。」

「あながあいているね。」

「ちいさいよ。」

「のぞきこんでごらん。」

「まっくらだよ」

「ほんとうなの？」

「あれ？」

「どうしたの？」

「ちいさなひかりがみえてきたようなきがしたの」

「ほんと？どれどれ？」

「あ、ほんとうだ。」

ひかりが、どんどんどんどんおおきくなってきたよ。

「うわあ！

すいこまれるー」

どんどんどんどんなかにはいっていこう。

あっちにあかるくてひろいばしょがあるよ。

これが、おしろのなかなかのか。

おおきなおおきなひろまでは パーティのまっさいちゅう。

うえには、大きなシャンデリアがたくさんぶらさがっています。

みんな、おもいおもいにおどっています。

「このひとたちはだれなんだろう？」

はじめてきたしらないばしょなのに、

なぜか、こわくありません。

「そのちいさなおふたりさん、
あなたたちは、どこのくにからきたのかね？」

おおきなランプをわきにかかえ、シルクハットをかぶり、つえをもった おひげのしんしが
テーブルのおいしそうなくだものをおさらにのせて、わたしてくれました。

「さくらは、ママのところからきました。」

「ぼくは、えっと、こうえんのちかくのおうちから・・・。」

「わたしは、マッシュルームおうこくからきたセント・ボーニはくしゃく。

こうして、このパーティで、いろんなひととゲームをするのがたのしみでね。」

「ゲーム？」

セント・ボーニはくしゃくが、つえをふると、くうちゅうに、りょうてをいっぱいひろげてもまだたりないくらいの むらさきいろのとうめいな まんまるのボールが できました。

そのまんまるのボールのなかには、
あかいろや、あおいろや、きいろののちいさなボールがちらばっています。

あかが、おじょうさん。
あおいろが、おぼっちゃん。
わたしは、きいろね。

じぶんのいろのちいさなボールをふやしていき、あいてのボールをへらしていくんだ。

これは、はじめてのひとでもできるかんたんなルールさ。

さあ、やってみようか。」

「わあ、たのしい。」

「うわー、さくらちゃんはずよいなあ」

「おぼっちゃんも、そういいながら、しっかりできてますよ。」

「はじめてなのに、じょうずにできましたね。

たのしませてもらったおれいに
このすいしょうのたまをふたりにプレゼントしましょう。」

セント・ボーニはくしゃくは、こいしくらいのちいさなとうめいなすいしょうだまをふたりに
くれました。

さくらちゃんのすいしょうは、ピンクいろにうすくひかり、
あおくんのすいしょうは、あおいろにうすくひかっています。

「わあ、すてき！」

「 おっとと、いけない。

つぎのやくそくのゲームのじかんだ。」

そういうと、はくしゃくは、わきにかかえていたトランプをうかばせて、
それに、とびのって、

「では、また。」

と、そらをとんで、

おおひろまをでていき、

そらにいるひとごみのなかまぎれていきました。

「おもしろそうだし、ついていってみようか」

と、ふたりは、かけだしましたが、あっというまにみうしなってしまいました。

そらは、なないろで、うかんでいるくもも、そらのあわいひかりにてらされながら、ゆったりとながれていきます。

そらでは、いろいろな、ふしぎないろいろなかたちをしたのりものにのったひとたちが、あっちにいたりこっちにいたりしています。

くもに ゆったりこしかけて ほんをよんでいるいるひともいれば、
ねそべって、たいようをみつめながら、くつろいでいるひともいます。

このくにのたいようは、
さくらちゃんとあおくんのいたせかいのたいようとはにているようでちがっています。

ギラギラとしていなくて、みても、めはいたくならないのです。

あおくんは、このたいようをみていると、おかあさんが、あおくんをだっこしてくれたような
のと、

ちがうけれども、にているような、そんなかんじがしました。

あるいていると、おおきなおおきなひろばにでてきました。

まんなかには、たかいたかいとうがそびえていて、
そこをまんなかにして、おおくのひとが、まわるようにしてうごいています。

とうのしたでは、いろんなひとがたのしくはなしあったり、さんぽをしたりしています。

そこからは、ひろいひろいみちがあって、
あまりにひろすぎるので、りょうわきには、どんなたてもものがあるかよくわからないのです。

そのみちのまんなかを、バスのような、しかくいのりものがとおりすぎます。

ほかにも、はねのはえたひとが、ちいさなはこをうんてんし、いったりきたりしています。

あとは、まるいいたのようなものにのって、そらをとんでいくひともいれば、

コーヒーカップにふたりでのって、まちのふうけいをたのしんでいるひともいます。

かぞえきれないほどのありとあらゆるかたちののりものが、
なないろのそらをいききしていました。

「どこにきちゃったんだろう。どこにいけばいいんだろう。」

あるいているうちに、あおくんは、あたまがくるぐるしてきました。

さくらちゃんは、たのしそうに、そらを見あげながら、さきへさきへとあるいていきます。

すこしずつ、すこしずつ、さくらちゃんと、あおくんははなれていきます。

さくらちゃんがさきにさきにいつてしまい、
さくらちゃんと、あおくんのあいだに、いろんなひとがとおっていきました。

そして、
ほんのすこし、さくらちゃんのすがたがかくれてしまいそうになりました。

「まってよ、さくらちゃん！」

さくらちゃんがふりむきます。

「どうしたの？」

「ぼく、ぼく、さくらちゃん、さくらちゃん・・・」

あおくんは、じぶんでもなにをいったらいいのかわかりませんでした。

かなしそうなあおくのかおを、さくらちゃんはきにすることもなく、

えがおで、

「ねえねえ、あのちゃいろいたてものの、あそこにあるのって、ケーキかな？
おいしそう！」

と、ゆびさしますが、

あおくんは、みるみるかおをしかめていきます。

「どうしたの。あおくん、ねえ。」

と、はなしかけていましたが、

そのうち、あおくんのめから、

なぜかわからないけれど、なみだがこぼれてきたのでした。

「あお・・・」

とさくらちゃんが、いいおわらないうちに、

あおくんは、とおりのまんなかで、

おおごえはだしませんが、なみだがあふれてあふれてとまらなくなり、

ぐーっと、かおをしかめたまま、

てまりのようなおおきさの なみだがつぎつぎとながれおちてきて、

とおりのじめんは、あめがふったあとのようになりました。

とおりにいたちかくのひとが、いっせいにこっちのふたりのほうをむきました。

いっせいにふたりのまわりにひとだかりができます。

「あれまあ、だれだい、このこどもたちは。

このくににいるひとにしては、あまりみかけないねえ。」

しらないひとたちが、せのたかさみつつぶんくらいはなれながら、
ひとだかりになって、こっちをみながらざわめきます。

さくらちゃんは、
あおくんによりそいながら、おどろいたようすで、まわりをみまわします。

さくらちゃんのめには、
まわりのひとたちは、 かおも からだも はいいろで、ただ、いろんないろにかわっていく
くちだけが
そのからだにひっついて、ちらちらともえるほのおのように ちいさくくらくかがやいて みえ
るのです。

「むこうのせかいだ。

そうだそうだ。むこうのせかいだ。

むこうの、にんげんたちのせかいのこどもだ。」

なみだをながしていたあおくんも、いつのまにかなみだをとめて、
さくらちゃんと、ぎゅっとてをつなぎながら、いったいどうしていいかわかりません。

「ちょっと、おまち！」

というこえとともに、
ひとがきのなかから、おんなのひとが、まんなかでたちつくすふたりにちかづきました。

ふたりのママとおなじくらいのとしで やさしそうなめをしたおばさんでした。

「いくところがないんだったら、うちにきたらいいよ。

さあ、ついておいで。」

ひとがきはまばらになり、

あらためてみると、
そこにいたひとたちは、みんな、ふつうのひとたちだということがわかりました。

まちのひとたちのようすも、
ほんとうにそれぞれちがいます。

あるひとは、あたまにうさぎのようなみみをはやしていたり、
あるおんなのこにはひたいに、ちいさなつのはやして、そこにリボンをむすんでおしゃ
れなどしていました。

あるおとこのひとは、くろいかさをもっていて、それをひろげて、そらをとんでいきました。
あるおんなのひとは、ドレスのなかにはねをしまっていて、がいしゅつのときには、それをひ
ろげてとんでいくのです。

あるひとは、ひとというか、そのままたまごのかたちをしていて、ようきにあるいています。

おばさんは、

そらを、どんぶりをひっくりかえしたようなのりものでいどうしているおとこのひとをよびとめて、

「ちょっと、そこのにいちゃん、ブラウンどおりまでやってくれるかい。」といいました。

えをかくひと のような ぼうしをかぶり、 みどりいろのほそいしっぽをだしているそのひとをみて、

ふたりとも、すこし、だいじょうぶかしんぱいになりましたが、

そのひとが、えがおをみせて、

「こどもたち、こいつをやるよ」

と、

すてきなえをかいてあるえはがきをくれたので、ふたりとも、かおをみあわせてわらいました。

「それ、おれがかいたんだよ。どうだい。」

ととくいげです。

おばさんがいいました。

「あ、もうしおくれたわね。

わたしは、トトというの。

トトおばさんでいいわよ。」

トトと、ふたりは、そののりものにのりこみます。

そののりものは、まっすぐにうかびあがって、なないろのそらでとびまわっているひとたちのむれのなかにとびこみます。

のりものの、そこにあるとうめいなまどからは、したのまちがみえます。

おおどおりがちいさくなって、はるかとおくのやまやまが、たいようにてらされて、かがやいています。

すこしうへのほうまでとぶと、

くものうえにねるひとや、くものあいだとびまわるひとのすがたは みえなくなってきました。

なないろのくものあいだを、のりものは おともなく、ながれるようにすすんでいきます。

くもがあつくなって、あたまのうえをてんじょうのようにおおってきました。

「へいっ！ここらですね。

じゃあ、おろします。

ありあとやんしたー！」

と、いったかとおもうと、

3にんは、しゃぼんだまのようなとうめいなきゅうのなかにいれられて、てんじょうのようなくものなかにほおりこまれました。

くものうえをでたとおもったら、
しゃぼんだまはわれるようになって、
そこには、たくさんのたてものがひろがっていました。

おおきなにんじんのいえに、ピーマンのいえ、かぼちゃのいえ、きのこのようなかたちをしたものもあります。

あちこちでは、こどもたちが、はしりまわったり、とびまわったりしています。

そんなとおりをあるきながら、トトおばさんが、ほほえみながらいいました。

「フッフ、そういえば、わたしも、むかし、こどものころに、あなたたちのせかいにまよいこんだことがあるわ。

なつかしくなってね。」

おおきなき が、そらにいくつものえだをひろげていました。

「さあついたわ。」

きのうろのなかにはいると、

たくさんのかいだんに、おおくのフロアが ばらばらに、かさなりあうようにうえにのびていました。

ロープにかかったせんたくものが、はたのようになんぼんもはってあります。

「おかあさんだー！」

「おかあさんー！」

「まーまー！」

なんにんものこどもたちが、フロアからかおをだして、じめんにとびおりて、いっせいに、トトおばさんにだきついてきます。

トトおばさんは、ひとりひとりをだきしめて、

「はいはいー。ただいまー。いまかえりましたよー。」

とあたまをなでます。

トトおばさんのうでのなかで、うずくまるようにだかれていた、とうめいのようなみずいろのながいかみをしたおんなのこが、うでごしに、こっちをみていました。

「あ、おかーしゃま、
このこたちは、いったいだあれ？」

「みんな、こちらをみて。

おきやくさまだよ。

お き や く さ ま。」

とてをたたきながら、トトおばさんがいます。

4にんのこどもたちのめがいっせいにこっちをむいたかとおもうと、

「わーっ！
おともだち！おともだち！
あたらしいおともだち！

やった！やった！

あそぼ！あそぼ！
いっしょにあそぼ！

なにしてあそぶ？」

と、すぐに、うでをとって、まわりをはしゃぎまわります。

「はいはい。

うれしいのはわかるけれども、

いまから、ごはんよ、ごはん！」

と、またてをたたくトトおばさん。

こどもたちのうごきがいっしゅんとまったかとおもうと、
また、おおさわぎ。

「わーい！ごはんだー！ごはんだー！

やったー！やったー！

このこたちといっしょにたべるんだね！」

「うんうん。」

「ぼくらは、ごはんつくるのおてつだいしてるんだよー！」

トトおばさんと、4人のこどもたちは、
いっせいにだいどころにむかいます。

「ふふふ、びっくりした？」

まあ、いっつもあんなかんじなのよ。」

トトおばさんは、ながいかみをくくりながら、いいます。

「ちょっとそのまえに、こどもたち。

それぞれ、じこしょうかいをしてくださいね。」

「わたし、ルーシー。

かぜをおこしたり、かぜにのったりしまあす。」

ながいかみをなびかせながら、おんなのこが、こたえました。

つぎに、あかくて、もえているようなかみのけをさかだてたおとこのこが、いいます。

「おれ、かーぼうっていうんだ。

だいどころでは、かまどのひ たんとうだよ。」

みどりいろでおちついたふんいきのおんなのこが、いいます。

「わたしは、ミリア。

きや だいち のことならまかせて。

このおうちをささえているのは、じつはわたしのよ。えっへん。

やさいも、たべものも、わたしがつくってまーす！」

そして、めがねをかけたおとこのこが、いいます。

「ぼくは、ジェフ。あめをふらせたり、かわをながしたり、うみになみをおこしたりしています。

うちのだいどころのみずは いちばんいいみずをつかってるんだよ。」

「みせてあげようか。

みせてあげようか。

すごいんだよ。

すごいんだよ。」

「そのまえに、ごはんだよ。」

「じゃあ、ルーシーと、かーぼうは、だいどころおねがいね。」

ミリアが、たきぎをかまどにだすと、

かーぼうが、そこに エネルギーをあつめて、ひをおこします。

ルーシーは、そこにつたっていただけですが、
ルーシーのからだからは、かぜがふいて、ひはあっというまにつよくなりました。

「ミリアねえはすごいなー。
るーちゃんなんか、つつたてるだけでいいもん。」

と、まだちいさなルーシーはくちをとんがらせています。

あたたまったなべに、ジェフがみずをいれると、

トトおばさんが、ミリアからうけとったやさいに、まほうをかけて、いろをかえていきます。

そして、それを
つぎつぎと、なべにほうりこんでいきます。

「あなたたちのだいこうぶつはなあに？」

トトおばさんが、さくらちゃんと、あおくんにききました。

「わたし、オムレツ！」

「ぼく、ハンバーグ！」

「そう。
じゃあ、ここでもつくってみましょうか。」

さて、
いよいよ、りょうりが、テーブルのうえに、でてきました。

さくらちゃんと、あおくん、
そして、トトおばさんとその4にんのこどもたちは、およろこび。

ひとくちたべただけでほっぺのおちるようなおいしさのスープに、
いろんなぐざいを きじにまきこんだたべもの。

いちどもたべたことのなかったしょくじですが、
なぜか、とってもなつかしいあじがしました。

ジェフのもってきた、とくべつなみずでつくったおちゃのようなものも、
まるで、おいしさがからだじゅうにしみわたるようでした。

ふと、
「このしょくじは、おひるごはんなのだろうか、、ばんごはんなのだろうか」

と、あおくんは、かんがえましたが、そとはあいかわらず、
あたたかなたいようがあって、なないろのくもが、あかるいそらにうかんでいます。

しょくじがおわると、
こどもたち4にんは、
さくらちゃんと、あおくんを、
いえのおそとにつれだしました。

「あそぼう あそぼう あそぼう あそぼう」

「そらをとぶほうほうをしらないの？しらないの？

おしえてあげる。

こうやって、かぜにのるんだよ。」

ルーシーのまわりでかぜがおこったかとおもうと、からだがふわあとかるくなって、
なぜのながれに からだのがのっていることがわかりました。

「そうそう！ そうやって、じぶんのまわりをかぜをこんとろーるして。

きゃははっ！」

るーしーはたのしそうに、おそらでおどっています。

ふたりとも、なれてきました。

「どろぼー・ほあんかんごっこしよう。

さくらちゃん、あおくんははじめてだから、ハンデつけてね。

あんぜんちたいは、あのくも。

それで、あのくもが、ろうやね。」

6にんは、そらをとびまわりました。

「はあ、たのしかった。

つかれたね。

じゃあ、こんどは・・・。」

「こんどは・・・？」

「この、オカリナで・・・。」

ルーシーは、オカリナをふたりにわたしました。

「そこのくもに、すわろう。」

ルーシーと、あとの3にんが、おかりなをふくと、

そのおとがかたちになって、そらにながれていきました。

「わあ、すごい！」

「あなたも、やってみて。」

「え？でも、ふいたことないし。」

「ここで、きもちよいとおもったことをそのまま、ふいてみて。」

ためしにふいてみると、おなじようにおとがかたちになって、そらにながれていきました。

「そうそう！そのかんじだよ。」

ふたりとも、むちゅうになってふいているうちに、

なぜか、おとがあってきました。

あとの4にんもそれにつづけてあわせていきます。

おとが、まちじゅうになりひびきます。

そらのいろが、かわっていきます。

6にんのまわりを、ここちよいかぜがわあああああっと、ふいて、

6にんをもちあげます。

くもや、かぜが、オーケストラのように、そのえんそうにくわりました。

そのおおきなうずのなかで、

さくらちゃんも、あおくんも、

どういったらいいかわからないような、あたたかくてうれしいきもちになりました。

そして、それは、きっと、このくうかんにいるすべてのひとがおなじきもちだということははっきりわかりました。

そのきょくがおわっていくことに、すこしさびしいようなきをかんじながら、
おとがなりやんで、まとまっていき、おわっていくときに、
とても、きれいで、うつくしい、きもちになりました。

えんそうがおわり、きがつくと、まちじゅうのひとと、くもやかぜやたいようまでが、
はくしゅかっさいでした。

「はあ、たのしかった。」

「もういっかいやろうね。」

「うん！」

「あの、ここには、よるはないの？」

「よる？」

「そう、よる。そらは、くらくなって、おほしさまや、おつきさまがでるの。」

「したいとおもえば、できるよ。」

もう、ねむくなったの？」

「うん。」

「じゃあ、きのいえにかえろうか。」

おやすみ。

るーちゃんたちも、いっしょにねるよー。」

きのいえのなかにかえると、
てんじょうがなくなっていて、まんてんのほしぞらがあかるくかがやいていました。

「このせかいで、ねむるということは、『もっとめざめる』ということよ。

わかる？」

ミリヤがいました。

「『もっと、めがさめる？』どういうこと？」

「いずれ、わかるわ。」

しんしつには、おおきなおおきなベッドがありました。

4にんのこどもたちは、
「おかあさん、おかあさん」と、トトおばさんのふとんのそばにもぐりこみます。

トトおばさんは、こっちをむいて、

「きみたちも、おいで。きていいよ。」とよびよせます。

そこで、トトおばさんは、おはなしをはじめました。

「おかあさんが、まだ、あなたたちのころのおはなし。」

と、トトおばさんはおはなしをはじめました。

「わたしは、もりのなかのたんけんに むちゅうになっていたの。
そうしたら、ずいぶんとおくまできてしまって。

よつばのクローバーのさきみだれるそうげんで、なんぼんかそれを てにもっていたの。
そうしたら、むこうのほうに、ちいさなあながあって。

そこをのぞきこんだの。

あなのおくをのぞいていると、むこうがわにいきたくなって、
ひっぱられて、きがついたら、しらないせかいがひろがっていたの。

みつばのクローバーがたくさんあるはたけにでてきたの。

しらないもの、みたことのないものがいっぱい、
ひとりきり。

ふあんになって、なきだしそうになっていたの。

そこに、ふたりのおんなのこがきて、わたしをみつけた。

ふたりとも、わたしといっしょにあそんでくれたの。」

さくらちゃんと、あおくんは、そのおんなのこふたりのイメージになにかしっているものをかん
じました。

さっき、かなでたメロディーのはへんが、かがやきながら、
よぞらのほしをおいかけて ちらばって、きえていくのがわかります。

はなしおわるころには、こどもたちはみんなねむりこんでいました。

さくらちゃんが、めをとじると、さくらちゃんのもうひとつのからだは、ふわあっとうきあがって、
もっと、おおきくて、あかるいせかいがみえてきました。

「これが、もっとめがさめる、ということなのね。」

その、もうひとつのからだは、もっとひろがっていったかとおもうと、
「もっと、うへのせかい」に、やってきました。

ひかりにあふれたせかいで、

ほかに、たてものや、くさきは みあたりませんでした。

さくらちゃんは、そこでは、「さくら」というなまえではありませんでした。

おもいだせないけれども、そこで、さくらちゃんは、「ひみつのほんとうのなまえ」をしりました。

そこでは、

さくらちゃんの、ほんとうの、パパとママをあわせたようなひとがいて、
そのひとは、さくらちゃんを、そのなまえでよんでいたのです。

さくらちゃんの、こころや、もうひとつのからだをつくってくれたひとなのです。

そのばしょからは、
せかいやうちゅうのあらゆることがみわたせました。

「つくってくれたひと」は、おおきなひかりのひろがり でした。

そのひとは、さくらちゃんにあるものをみせてくれました。

さくらちゃんが、さくらちゃんとしてうまれるまえのえいぞうでした。

かわいいあかちゃんが ねむっていました。

そのあかちゃんは、さくらちゃんじしんでした。

ままと、ぱぱが、そばにいて、ねむっているじぶんをなでてくれています。

さくらちゃんは、「わたしは、このこになるのね。」とおもいました。

そうして、
さびしいような、
うれしいようなきもちになりました。

さびしいのは、
じぶんをつくってくれたひとのところからはなれること。

うれしいのは、なにか、あたらしいぼうけんのたびにでるようなたのしさやワクワクをかんじて
。

しばらく、さくらちゃんは、このこになると、
なにもできなくなりますが、
それでも、あんしんしていました。

ぱぱと、ママがささえてくれることをしていたからです。

いっぽう、あおくんも、
「もうひとつのからだ」になって、うへのせかいにいきます。

あおくんの「もうひとつのからだ」は、
どんどん、ひろがって行って、
すべてのせかいが、
まるで、じぶんのからだの、ひふや、てや、あしみたいにかんじられて、
せかいにいきるひとたちの　ころや　きもちが、よくわかるのです。

そらをとぶとり、
のにさくはな、
ちじょうをかけまわるたくさんのどうぶつも、
あおくんの「もうひとつのからだ」のいちぶぶんなのです。

やまや、はなや、くさや、きは、
いきていることをとてもよろこんでいるようです。

たいようも、そらも、生きていました。

「もうひとつのからだ」は、
このせかいの「なにかひとつ」になりたいと、おもいました。

どれになりたいかをかんがえたら、
「にんげんがいいよ」というこえがきこえてきました。

そこで、あおくんは、
なかよしだった、ふたりのところにいきました。

あおくんの、パパと、ママでした。

「よろしく」とそこでいったようなきがしました。

ふたりは、やさしくうなずいたのです。

さて、

ふたりとも、「もうひとつのからだ」が、
トトさんのところのベッドにもどってきました。

よぞらのほしぼしがきえさって、また、もとの おおきな き のいえです。

4にんのこどもたちも、いっしょに、おきて、

そとにでます。

「もう、かえらなくっちゃ。

ずいぶん、ながいこと、ここにいたわ。

ままがしんぱいしている。」

ふたりとも、とてもかなしいきもちになりました。

それは、このいえのみんなもおなじこと。

うかんでいくもたちも、みんなあおくなったり、はいいろになったりして、
なみだをながして、あめをふらせはじめました。

すると、 そらから、きらきらしたものがふってきました。

きっと、ほしぞらまでたどりついた、きのうかなでたメロディーのつぶつぶが、
あめにとけて、また、このまちにもどってきたのです。

ふたりがわらうと、
よにんのこどもたちもわらいました。

すると、くもは、なくのをやめて、またこのまちに、ひかりがかがやきはじめました。

たいようが、てって、
そらが、またなないろにかがやきだすと、どうでしょう！

じめんにおちた、
メロディーのはへんから、
あたらしいはながさいてきたではありませんか。

はなは、
このまちぜんたいにさきほこり、
うつくしくかざりました。

かぜがふいたかとおもうと、

あのパーティでであった、セント・ボーニはくしゃくが、トランプにのって、やってきました。

「あおおうじさま、

さくらおうじょさま、

おむかえにあがりました。」

「おうじ？」

「おうじょ？」

「あなたの、つくったすてきなおしろです。」

トトおばさんと、4にんのこどもは、てをたたいておおよろこび。

「やったやった。

おうじさまと、おうじょさまだ！」

ふたりは、きょとんとしながら、セント・ボーニはくしゃくのトランプにいっしょにのりこもう

としました。

そのまえに、

「またあえるよね。」

「うん、あおうとおもったら、いつでも！」

と、みんなをだきしめたのでした。

トランプは、かぜにのって、くものあいだをとんでいきます。

「あれです。」

と、はくしゃくが、つえでさしたさきには、

どこかでみたようなおしろが。

「あ、ここにくるまえに、ふたりでつくっていたおしろだ！」

はたがはためき、まっすぐなとうがたっています。

「でも、かんせいは、あとひゃくねんごです。」

「えええ！？ ひゃくねんごー？」

「だいじょうぶですとも。

ふたりのところがりっぱになったら、そのぶんできあがったときのよろこびもおおきいからです。

そのときには、きゅうでんは、ほうせきでいっぱいにかざられているはずです。」

つくりかけのおしろをみながら、

さくらちゃんは、「おうじさまー！」とあおのうでをぎゅっとつかんだのでした。

あおくんは、あかくなってうつむいてしまいました。

「さくらちゃん、ぼくがんばるね。」

トランプは、クローバーのそうげんのうえまできました。

クローバーたちは、いっせいにこっちをむいて、えがおでむかえにきてくれました。

そこで、さくらちゃん、あおくんはおります。

「では、さらばです。

かえると、あなたたちは、このくにのことをすべてわすれてしまうでしょう。

けれど、またいずれ、おもいだすときがくるはずです。

また、あえるといいですね。」

それをきいて、ふたりとも、かなしくなりました。

「そんなのぜったいいやだ！

いったい、どうしたらあえるの？」

はくしゃくは、わらっていいました。

「それは、わたしにもわかりません。

・・・あったでしょう。

あなたたちのもうひとつのからだが、こころとからだをあたえてくれたひとに。

そのひとだけがしていますよ。」

そういうと、はくしゃくは、トランプにのって、すぐにとんでいってしまいました。

クローバーたちが、

「こっちだよ」と、ふたりにこえをかけて、みちをしめしてくれます。

ふたりは、てをつないで、あるいていきました。

まわりのけしきが、ぼやけてきてきたかとおもうと、

なにかぼそぼそとはなしごえをするこえがきこえてきました。

そのこえをするほうこうに、ぼやけたとんねるをあるいていきました。

あおくんは、きゅうにとてもさみしいきもちにおそわれました。

きがついたら、てをつないでいたはずのさくらちゃんがいなくなって、

くらやみのとんねるのなかをひとりでただよっています。

このさきどうなるかわからないし、

このトンネルのせかいのそとになにかがあるかわからないなか、

あたたかいくらやみのなかをふわふわとあるいているのです。

さっきまでいたたのしくてふしぎなせかいが、どこかぼやけておもいだせなくなってきました。

そのことが、あおくんには、とてもさみしくてさみしくてしかたがなかったのです。

この、よくわからなくて、なにもみえないせかいのなか、じぶんだけがだれともつながることのできないまま、ひとりぼっちのようなきがして、いてもたってもいられなくなりました。

そこに、

「あおー！」

というこえがきこえてきました。

「あおー！」

「さくらちゃん！」

そのこえがきこえたかとおもうと、

ふたりは、てをつないだまま、クローバーのはたけのなかにねころがっていました。

ながいながいぼうけんをしてきたようにかんじましたが、

おひさまが、すこしかたむきかけているだけです。

ふたりは、ねころがったまま、めをあわせて、
なんだかうれしくなって、かおをあわせてわらいました。

「あらあら、こんなところでねていたのね。」

「ふたりとも、なかよしねえ。」

という、ママのこえをきいたとたん、
ふたりとも、かけよってだきあげられました。

「あのね！あのね！ママ！！あのね！！
ぼくたちね！
わたしたちね！・・・

あれ・・・？

すごーくひろい、くもや、そらでね・・・

あれ・・・？

なんだったっけ？」

うしろで、クローバーたちがほほえんだようにみえました。

さくらちゃんの おかあさんも、 あおくんのおかあさんも、

クローバーばたけのほうをみて、はっとしました。

さくらちゃんのママと、あおくんのママは、こどものころからのなかよしでした。

ちょうど、ふたりのとしごろのときから。

ふたりとも、はっとして、だっこしたまま、かおをみあわせて、わらいました。

「あなたにも、わかったのね？」と。

「さあ、すこし、おそくなってきたから、かえりましょう。

またね。」

かえりのみちで、ふたりのママは、おなじことを、さくらちゃんにも、あおくんにもいいました。

「あなたも、あったのね。

しってるよ。

ママも、むかーし、むかーし、あったことあるもの。

いっしょにあそんだことあるもの。

おもいだしたわ。

でも、これは、わたしたちだけのひみつね。」

「さくら、うまれてきてくれてありがとう。」

「あお、うまれてきてくれてありがとう。」

◆おしまい◆